事　業　名　称	地域の多主体が連携した空き家対策の拠りどころ「信濃大町まち守舎」の創出
事業主体名	信濃大町まち守舎
連　　携　　先	大町市役所、東京大学、信州大学
対　象　地　域	長野県大町市
事業の特徴	・　アウトドア商品の販売やサイクル・ランステーション機能を有する山岳情報拠点「.BASE OMACHI（ドットベースオオマチ）」内に、まち歩き・やま遊び・空き家紹介、旅から移住定住までを応援する「相談窓口」を開設 ・　住人自らが案内する住人十色のまち歩き「大町わがまち案内人」の開催 ・　地域を学び、地域で実践する「空き家の学校」のシリーズ開催 ・　地元専門家による「空き家の相談会」の開催 ・　インスペクションの促進 ・　空き家・空き店舗の物語を記録する「空き資源カルテ」の作成 ・　「人」を紹介する不動産情報ウェブサイトの構築（2020 年春公開予定）
成　　果	これまで見えなかった、地域における、空き資源情報の生産→共有→試用の場の創出を地域のステークホルダー（住民・高校・大学・行政ら）で協働実践（プロセスを共有）することで中間支援活動の輪郭を形づくる可能性が示された。また、事業実施の成果物として、相談窓口・大町わがまち案内人・空き家の学校・空き家の相談会の実施報告及び空き資源カルテを作成した。
成果の公表先	朝日新聞、中日新聞、日本経済新聞、大糸タイムス各社の新聞掲載 10 件、現在構築中のウェブサイトで様々な上記取組や情報を掲載する予定

１．事業の背景と目的

これまでの大学と行政による共同研究で推進してきた、地元の高校生から自治会長まで多様な主体が参画するスクール形式の「空き家の学校」の取り組みが特徴である。不動産所有者や移住希望者らも参加する機会として成長し、空き家の掃除から民泊の勉強、実際に改修までも学びながら実践するプロセスの共有の現場となっている。地域内外の人と人が出会える場として、空き家の貸し手・借り手、売り手・買い手とのマッチングも生まれてきている。この取り組みを基にして公民学連携のエリア・マネジメント組織「信濃大町まち守舎」が 2019 年 5 月に発足し、イベント時などの非日常的な機会だけでなく、日常的な多主体の活躍・連携拠点として、やま遊びから移住定住、空き家、暮らし、人に関する相談窓口の開設や住人自らが案内する住人十色のまち歩き「大町わがまち案内人」のシリーズ化、空き家の相談会の開催、インスペクションの促進等の様々な取り組みを本事業において展開している（図1）。

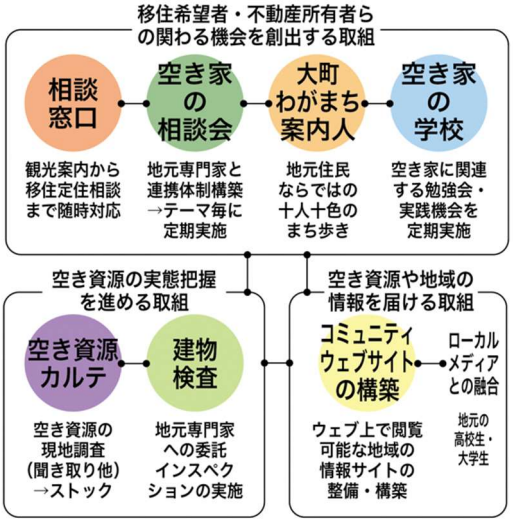

図１　本事業全体の関係図

そして、本事業では特にこれまで見えていなかった空き資源の見える化をウェブサイトの設立を契機にして促そうと試みている。これまでの住情報のあり方を問い直し、「人を紹介する不動産情報サイト」を目指し、現在鋭意その準備を進めている。具体的には、空き資源カルテの作成を通して建物の履歴や物語を所有者らへの取材記事として紹介するものであり、人と人が出会える情報生産を目指している。この積み重ねによって、単なる空き家一軒の解消に留まらない、地域自治の活性化や観光客や移住者等の受け皿としての

価値を高めることを目指している。発足したばかりの組織のスタートアップとして、機能の充実や体制の検討を深めていくことで、空き家対策の基盤づくりを行うことが目的である。

２．事業の内容

（１）事業の概要と手順

ステップ	具体的な取組内容	令和元年度								
		7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
共有の場・試す機会	①相談窓口の開設・相談事務の実施(随時)		準備			開設				
	②まち歩き「大町わがまち案内人」の開催 (11・12月に4人、1・2月に4人の計8人の住人十色のまち歩き)					●●	●●	●●	●●	
	③「空き家の学校」の開催(先進地視察など研修機会としても実施) :上記のまち歩きと連動して実施					●	●	●	●● 視察	
	④「空き家の相談会」の開催(地域の専門家と協働しテーマ毎に実施) :上記のまち歩きと連動して実施								●	
情報生産	①空き家・空き店舗の募集呼び掛け		随時							
	②「空き資源カルテ」の調査・作成:所有者からの連絡に基づき、現地調査やインタビュー等を行い記録化・マッチング情報のストック		随時	インスペクションの実施			空き資源カルテ3件			
	③ウェブ空間のプラットフォーム「コミュニティサイト」の制作:サイトマップおよびデザインの検討、ローカル・メディアとの融合					記事化				
	④ウェブ空間のプラットフォーム「コミュニティサイト」の制作:パイロット版の開設・運用面の検証へ→来春から本格稼働(予定)					準備				

図２．事業進捗の見取り図

事業の概要と手順は図 2 のとおり、これまで「空き家の学校」の教室として活用させて頂いた「旧ミヤハラ電器店(写真 1)」が「.BASE OMACHI(写真 2)」として 2019 年 11 月に生まれ変わり、アウトドアショップ＋αの機能の他に空き資源情報の拠点・窓口として、山から空き家まで、多彩なコンシェルジュ機能を有する場が実際に完成しプレ・オープンした。空き店舗の再生プロセス自体を段階的に学びの場として扱い、協働で創り上げることで、地域の様々な方々との接点を構築した。人と情報の集う新たな交流拠点として、日々進化している。これからの「空き資源の活用・流通」における環境が構築しつつあることを特筆する。

写真 1. 旧ミヤハラ電器店（2018 年 6 月 24 日撮影）
約 10 年間空き店舗となっていた電器店１階を「空き家の学校」の教室として活用

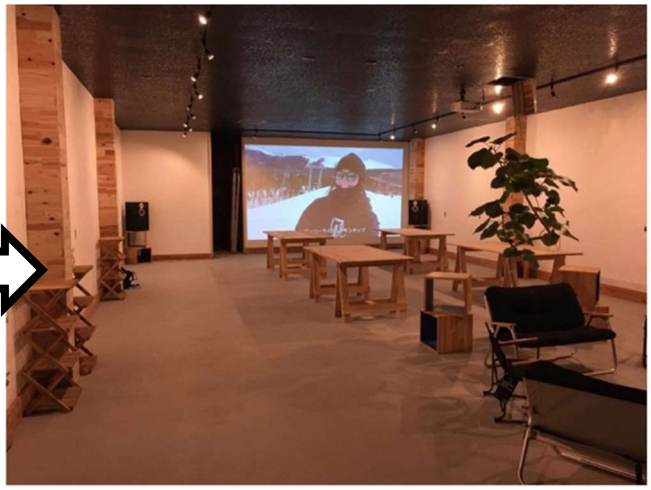

写真 2. .BASE OMACHI（2019 年 11 月 14 日撮影）
株式会社フリーフロートが運営するアウトドアの展示販売、ランナー・サイクリストらのための更衣室・シャワールーム（来春本格稼働予定）、貸しスペース、コワーキング機能、山やアウトドアから移住・空き家等の情報拠点・窓口機能などを有する

（２）事業の取組詳細（図２と対応）

【共有の場・試す機会】

① 相談窓口の開設・相談事務の実施

2019年11月にプレ・オープンした写真2の拠点施設内に、まち歩き・やま遊び・空き家紹介、旅から移住定住までを応援し、北アルプス山麓の大町ならではの暮らしに関する情報提供、人と出会う場として、相談窓口を2019年12月14日に開設した。北アルプス山麓の地域柄、山好きな相談者・移住者が多くいることがこれまでの調査で明らかになっていたため、別々のセクションに分けずにあえて統合した多機能な窓口として設置した。これまで実施回数は、2020年2月28日現在で合計30回、参加数は34組にのぼっている。

誰でも気軽に相談できる場所がまちなかに創出されたことで、移住目的の方がスポーツ・アクティビティの情報を、山岳情報を目的に来訪した方が空き家の情報を、という具合に単一の目的のための場ではなく、本来ならば多領域にまたがる興味・関心の受け皿として機能し始めている。

図３ 相談窓口の開設をお知らせするチラシ

表１ 相談窓口開設一覧

相談対応 担当者	開設日	相談者
高松 永和さん（design nuts）	12/14、27、1/10、11、24、25、2/7、8、21	13組
勝亦 達夫さん（信州大学助教）	12/25	1組
屋田 翔太さん（株式会社フリーフロート代表）	12/19、26、1/16、2/6、13、14、25	8組
堀口 拓さん（一級建築士事務所 大町ぶぶ）	12/28、1/15、22、23、29、30、2/5、12、26、27	23組
神社 正幸さん（五日町住人）	1/9、2/11	1組
	計	46組

相談窓口業務として、1)まず気軽に雑談、店内の紹介などをするなかで、相談者のいろいろな思いを汲み取る→2)相談内容の記録（相談対応シートに記録する）→3)相談内容の共有（信濃大町まち守舎のMLを活用して情報共有、データのストック→4）相談対応の検討（月一回の定例会議で議論すべきものはどのような状況かを直接共有し、加速的に議論すべきものは、オンライン上で臨時に検討する）。

相談窓口が有する機能として、予定も含め提供できる環境を用意した。

- 地域の空き資源所有者および移住希望者だけでなく、老若男女誰でも気軽に雑談ができる場所として提供。
- まち歩きや空き家の学校等のまち守舎が主催するチラシ、その他市内の様々な団体のイベン等のチラシを置ける環境を用意する。
- 相談事をシートに記入し掲示できるようにする（ウェブサイト上でも実装予定）。
- 空間情報（地図／模型）の展示（予定）

- ウェブサイトの登録者用コンテンツの閲覧のためのアカウント登録がこの相談窓口でのみ可能とする(アカウント制)。「まず来てもらう」ことで、旅の延長の移住を検討してもらいたい。
- 空き資源カルテの閲覧(案内も将来的に実施する予定:まち歩きと連動)
- その他、山岳情報やスポーツ・アクティビテイの情報、

② まち歩き「大町わがまち案内人」の開催

住人自らが案内する住人十色(十人十色)のまち歩き「大町わがまち案内人」を秋編計4回、冬編計4回の合計8回開催した。同じまちでも、案内する方の視点や巡りかたによって異なる価値を生み出すことができるため、リピーターも散見された。開催概要は、表2のとおり。合計　人の参加者があり、これまで埋没していたまちの魅力をあらためて知る機会となった。開催チラシや当日の様子などの詳細な記録は、提出書類⑭:本事業の経費で作成した成果物を参照のこと。

表２　「大町わがまち案内人」の開催概要

Ver.	回	日付	まち歩き内容(見出し)	案内人	参加者
秋	Vol.1	11/15	「町屋と塩の道を巡って」	渡邉　充子さん((株)創舎わちがい代表取締役)	8 人
	Vol.2	11/16	「甘味とまち歩き、時々お酒」	小松　令子さん(仁科町住人)	6 人
	Vol.3	12/13	「まちの成り立ちと水の関わりを探る」	鈴木　幸佳さん(ぐるったネットワーク大町事務局長)	9 人
	Vol.4	12/14	「まちなかで感じる山とダム」	梅田　敏男さん(多趣味な建築設計士)	6 人
冬	Vol.5	1/18	「大町の映画館文化とレトロ喫茶巡り」	中村　直人さん(商店街生まれ商店街育ち)	7 人
	Vol.6	1/26	「大町で生活も仕事もDIY！マイライフ探しのお手伝いします」	屋田　翔太さん((株)フリーフロート代表取締役)	9 人
	Vol.7	2/8	「大町のまちなか巡って！撮って！“映える”写真伝授します」	たつみ　かずきさん(とある音楽家の古民家管理人)	6 人
	Vol.8	2/25	「古地図を片手にまちなか歩き！」	梅田　敏男さん(多趣味な建築設計士)	10 人

③ 「空き家の学校」の開催

地域から学び地域で実践する「空き家の学校」は、主に平日の夜に開催する座学と土日を使って開催する実践の両面で構成されている。これまで、この場を通じて家主と企業希望者が出会うことで空き店舗の再生にも繋がっている交流機会である。市外近隣市町村の参加者も多く、扱うテーマ等も参加者らによって発案されることも増加してきている。表3に開催概要を示す(詳細は、提出書類⑭:本事業の経費で作成した成果物を参照)。

表３　「空き家の学校」の開催概要

日付	テーマ・題目	講師・視察先	参加者数
11/15	座学「インスペクションしてみませんか？」	竹内　祐一さん(竹内設計工房代表)	11 人
12/18	座学「ポートランドのまちづくりから学ぶ」	勝亦　達夫さん(信州大学助教)	15 人
1/24	座学「まちの空き資源を活用する～浅間温泉わいわい広場の取り組み」	柳澤　直樹さん(株式会社地食地産) 小澤　智幸さん(株式会社地食地産)	32 人
2/18-19	先進地視察「石川県金沢市～輪島市」 ※2 時限分としてカウント	金沢市:シェア金沢、金澤町屋情報館ほか 輪島市:うめのやBULLET、輪島カブーレほか	18 人
2/24	実践「まちの空き資源を活用して暮らす・創る」	相澤　正樹さん(陶芸家)	28 人
2/28	座学「古民家を活用してサスティナブルな社会をつくる」	山上　浩明さん(株式会社山翠舎　代表取締役)	コロナ対応のため延期
		計	104 人

④ 「空き家の相談会」の開催

地域の専門家と協働しテーマ毎（例：賃貸・売買／建物調査／相続・税務／解体・古材リユースなど）に実施し、オーナーや起業・移住希望者等のそれぞれのニーズに対応した専門家による相談会を開催した。

本事業期間内では、実はなかなか相談するにはハードルの高い不動産屋さんを講師に迎え、より気軽に市内の不動産事情（相場・流通状況等）について相対できる機会を創出した。開催概要は表4のとおり（チラシ等の詳細は、提出書類⑭：本事業の経費で作成した成果物を参照）。

表４ 「空き家の相談会」の開催概要

日付	テーマ・題目	講師	参加者
2/13	「大町の不動産事情を知る－まちの不動産屋さんによる空き家相談会」	金井 透貴さん（さくら不動産 大町支店長）	10 人

【情報生産】

① 空き家・空き店舗の募集呼び掛け

図４ 空き家・空き店舗募集チラシ

空き資源カルテの調査候補の発掘及び、さらなる空き資源の情報生産・流通に向け、大町市中心市街地のエリアを占める大町地区限定でオーナーによる手あげ型の募集情宣を行った（図4）。実際に4件の問合せがあり、個別にオーナーへの聞き取り・現地の状況確認を行い、空き資源カルテの対象物件となっている。今後も、随時相談機会を創出しつつ、埋もれていた空き資源情報を発掘する。

② 「空き資源カルテ」の調査・作成

空き資源カルテとは空き家や空き店舗等を資源と捉え、これまで一緒くたにされてきた空き家情報のあり方を改めて問い直し、建造物が持つ様々な潜在的情報にも注目する。つまり、空き資源の個性を家主を中心にインタビューとして抽出することを目的としている。市内のデザイン・編集・ライティング制作に長けた方々にインタビュアーとして参画いただいた（写真3）。ウェブサイトへの記事化をまずは目標に、1)オーナー(またはオーナーのご家族や関係者、経営していた店舗・企業等)の物語・文脈を中心的に掘り下げ、話し手の言葉を中心に紹介（特に、誇りやこだわり、ターニングポイント、増改築の履歴など）、2)オーナー等の現在の当該空き資源に対する

写真３ 現地でのインタビューの様子
九日町 旧美寿々

想い（当該空き資源をどうしたいのか・どんな人に/どのように使ってもらいたいのか）、3)オーナー等の地域に対する想い、4)オーナー等（話し手）の現地での顔写真（バストショット）、当時の写真（聞き取り内容と関係のある写真が望ましい）、5)その他（記事に掲載はしないが、情報として記録し限定的に開示する項目）として、所在地住所・規模（階数）・構造・築年数・敷地面積・延床面積・建ぺい率・容積率・駐車場の有無(台数)・倉庫など附属屋の有無・主要な採光面の方角・設備関係（上下水道・電気・トイレ・浴室等）の情報・接道状況・用途地域・都市計画法上の区域・図面（確認申請時のものなど）・その他特記事項を有するシートを用いて記録した。本事業期間内で実施した4件の空き資源・6本の記事の一覧を表5に示す（記事の成果は、提出書類⑭：本事業の経費で作成した成果物を参照。6 本のうち 3 本で、残り 3 本は作成中）。

表５　「空き資源カルテ」の調査対象一覧

町名	物件名	インタビュイー	ライター担当
九日町	旧美寿々	小日向　忠さん・孝さん（旧美寿々　オーナー）	髙松　永和さん
日の出町	旧オビ金物店	小尾　信二さん（旧オビ金物店　オーナー）	稲澤　そし恵さん
大原町	旧木彫の館	内山　翔平さん（木工職人）	
八日町	.BASE OMACHI （旧ミヤハラ電器店）	宮原　敏樹さん（旧ミヤハラ電器店　オーナー） 屋田　翔太さん（株式会社フリーフロート　代表）	髙松　香苗さん 髙松　永和さん

③　④　人ベースのコミュニティサイトのデザイン検討・制作・稼働に向けて

空き家は「人」の物語である。家族の歴史や生業・仕事の歴史そのものである。同じものは一つとして無く、様々な痕跡を残している。一方で、移住や起業には大きな覚悟が必要で、その地域に暮らす魅力やさらに地域の方々との関係性構築が求められる。そこで本事業では、人を紹介する不動産情報としてのあり方を示し、先輩移住者やリノベ経験者へのインタビュー記事、地元高校生らのローカル・メディア

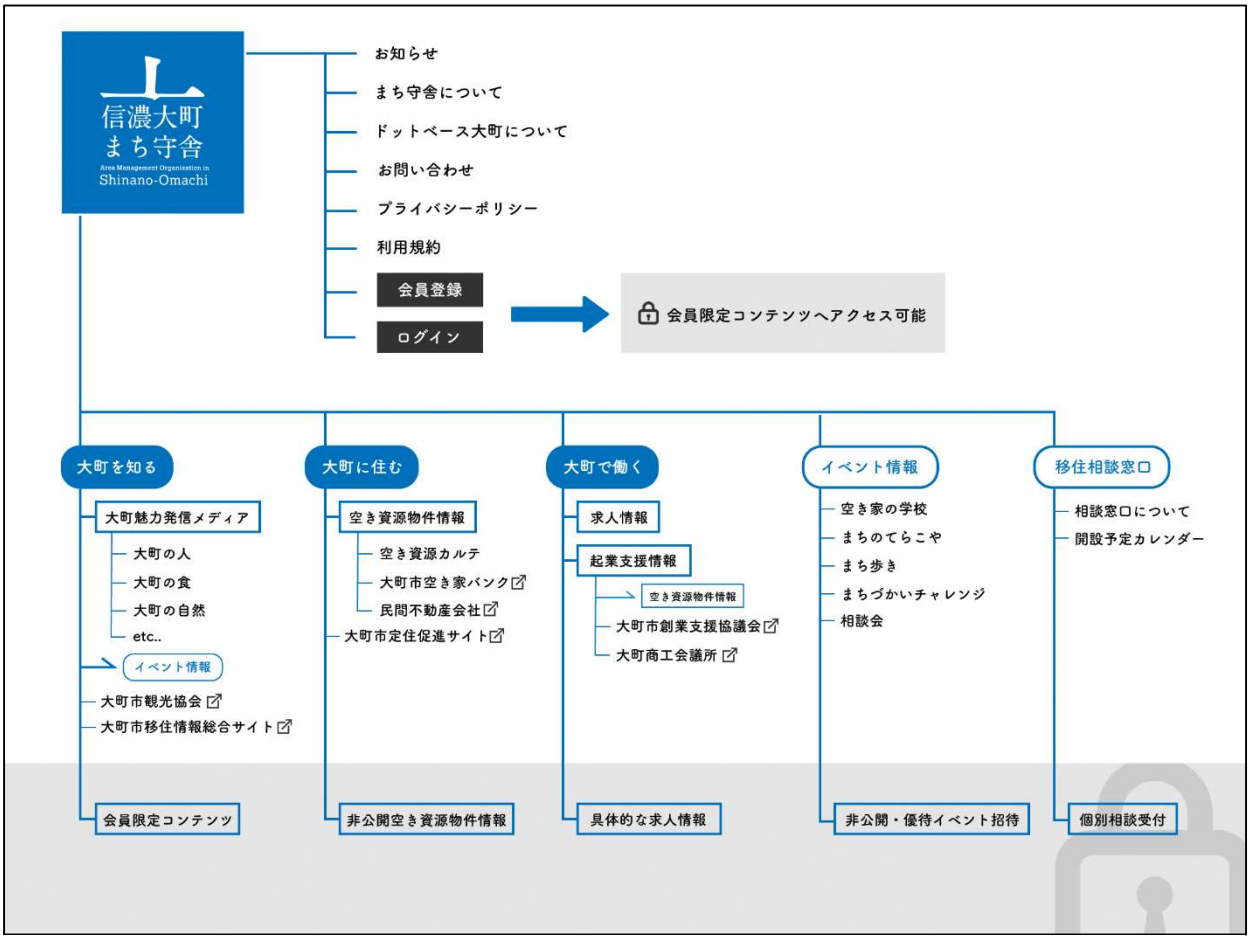

図５　コミュニティサイトのサイトマップ（現在構築中）

「まちのてらこや」と融合するなど地域の諸種のあらゆる暮らしに関する情報を対象に、信濃大町まち守舎のウェブサイトに実装する予定である。本事業期間内で実施した様々な取り組みの報告記事ならびに、今後開催するお知らせを掲載し特定の SNS と連動するなどの機能も有する。

そして、本サイトはアカウント登録制とし、相談窓口に来訪しなければこのアカウントを得ることができない（または友人の紹介制を含めることも検討中）。つまり、まずは直接現地に訪れてもらい、相談窓口等を契機に空き家の学校やまち歩きへの参加を促すなかで、家主を含めた地域の方々との交流機会が生まれる設計とした。図5に現在構築中のサイトマップを示し、図6・7に構築中のスクリーンショットを例示する。本サイトの本格的な稼働は、2020 年春を予定している（URL：**machimorisha.jp**）。

←図６・↑図７　コミュニティサイトの一例

（３）成果

① 取り組みの成果一覧

本事業の主要な成果として、これまで地域に顕在化されていなかった、空き資源**情報の生産→共有→試用の場の創出**を地域のステークホルダー（住民・高校・大学・企業・行政ら）で協働実践（プロセスを共有）することで中間支援活動の輪郭を形づくる可能性が示されてきた。それぞれの取り組みの概要を表6にまとめた。その他、相談窓口の拠点に様々なアクティビティも生まれている（写真4）。

表６　各取り組みの成果一覧

取り組み内容	目的・ねらい	対象者	実施数	参加数
定例会議・月例会議	情報共有機会・ディスカッションの場	まち守舎構成員・サポーター	12 回	147 人
相談窓口対応	山岳情報から移住・起業まで支援する暮らしのエントランス機能の創出	どなたでも	29 回	46 組
出張相談・現地視察		オーナーが中心	3 件	－
「大町わがまち案内人」	住人十色のまちの視点・価値の創出	案内人(住人)／参加者（一般）	8 回	45 人
「空き家の学校」	スクール形式の交流・実践機会の創出	どなたでも	6 回	104 人
「空き家の相談会」	専門家への相談機会の創出	どなたでも	1 回	10 人
インスペクション	現況把握による情報生産・流通促進	オーナー・空き資源活用者ら	2 件	－
空き資源カルテ（記事）	人・家族・生業等の暮らしの履歴や物語を通じた不動産情報の生産	オーナーや空き資源活用者ら	6 件	－
コミュニティサイト	知る／住む／働くで構成する大町暮らしの情報生産・マッチング機会の創出	どなたでも（アカウント登録制）	－	来春稼働予定

プレオープン・パーティー

信濃大町まち守舎定例会議

相談窓口対応

高校生たちの居場所/寄り道

空き家の学校

フライヤー棚の設置

キックボクシング

大町わがまち案内人

ストリート会議

写真４　相談窓口の入る.BASE OMACHI を地域の多主体が多様な使い方を実践中

また、成果物として、相談窓口・大町わがまち案内人・空き家の学校・空き家の相談会について、それぞれ作成したチラシ画像や実施時の写真、参加人数等の記載により実施報告を作成した。空き資源カルテについては、各記事１本あたり 1,000 文字強、A4 サイズ１枚程度にまとめ、信濃大町まち守舎のサイトにそのままの形で掲載して読みやすいもの、またプリントアウトしても見やすいものをフォーマット化して作成した。（各成果物の抜粋は図8～12。実際の成果物は提出書類⑭：本事業の経費で作成した成果物を参照のこと）

↑図８　相談窓口開催報告抜粋／↓図９　大町わがまち案内人開催報告抜粋

空き家の学校11時限目
「まちの空き資源を活用して暮らす・創る」

令和2年2月24日（月）13：30～16：30　　参加者28名

講師：相澤　正樹　氏（陶芸家）

大町市に移住し、空き家を住居兼工房として活用している陶芸家・相澤正樹さんによる陶芸体験＆工房を見学しながら移住体験談をお聞きしました。

↑図 10　空き家の学校開催報告抜粋／↓図 11　空き家の相談会開催報告抜粋

空き家の相談会
「大町の不動産事情を知る」

令和2年2月13日（木）14：00～16：30　　参加者10名

講師：金井　透貴　氏（さくら不動産 大町支店長）

まちの不動産のプロをお招きし、大町市内の不動産の相場や流通事情をお話しいただきました。
後半は移住希望者、市内で賃貸住まいの方など、不動産を探している方の個別相談に乗っていただきました。

町の“顔役”として
60余年続いた飲食店跡

九日町・旧飲食店「食堂 美寿々」

オーナー　小日向 忠さん・孝さん

集金写真の撮影に写る松葉子の妻が小日向さんの生家。創業当初はこの家を改装して食堂を始めた。

2階建て。黒部ダム観光が盛んになると100名ほどがここで昼食をとった。

観光バスへの付出し弁当の見本紙（右）と、観光ツアー会社が作成したパンフレット（左）。

信濃大町駅から北へ抜ける商店街の一画、塩の道・千国街道沿いにその空き店舗はある。

「ここはもともと私が生まれた家で、住宅を改装して昭和29年に父親と一緒に食堂を始めました。最初は板張り木小屋（けごや）だったんですよ。」

オーナーの小日向 忠さん（御年84歳）。お話を伺いに訪れると、しっかりとした口調で話し始めた。

「父親は教員でしたが、激増した折に町のみなさんが集まれるような場所を作りたいってことで食堂を始めたんです。最初は丼ものや定食、中華そば、うどんなんかを出して賑わっていました」

当時、忠さんは20代前半。お父上の想いを受け、この食堂を弟の孝さんと共に継げ食った。その後経営が軌道に乗ると、昭和37年ごろに店舗と住宅を完全に分ける形で新築。裏手に住居を構え、店舗は現在に近い2階建てになった。

「幾々に料理の覚えはないから職人を雇って始めて、昭和35年ごろには寿司も出すようになりました。そのころから町の皆さんによく使ってもらえるようになって、中には名物と言われるような料理もあったんですよ」――忠さんは懐かしそうにそう話す。

「昭和53年には2階を改装して座敷にして、本格的に宴会もできるようにしたんです」
2階の座敷はふすまで仕切れば30畳、間仕すれば26畳ある。広いこの2種座敷ではご近所さんが祭ごとや集まりの慰労のために利用したそうだ。

「最繁期には従業員が10名くらいいて、広い厨房を全部使って料理を作っていたもんです。黒部ダムができて観光が盛んになると、ツアー客相手に観光食を提供したり、仕出しで弁当を出したりしてね。朝から晩までお客さんの対応をしていましたよ」1階、2階を合わせて120名ほどのお客さんの対応をしていた。

「平成20年に身体を壊してしまって、それで一度お店を手放したんです。だけど「美寿々」の屋号はそのままにして欲しい、飲食店をやって欲しいって条件はつけました」

忠さんから店舗を引き継いだ方は、宴会もできる蕎麦屋として平成29年の8月まで営業していた。忠さんご家族が食堂を始めた昭和29年から数えると、実に60年近くも飲食店として営業していたことになる。

「美寿々さんがお店を閉めてからこの辺りは火が消えたようだ、ってよく町の人に言われるんです」弟の孝さんがふとそんなことをもらした。

「できれば私も、今までのように飲食店をやりたいって思いもある。少なからず町のみなさんに愛された料理もあるしね。だけど年齢を考えると、若い方にやってもらったほうがいいと思って」そう話す忠さんは、店舗を貸し出す形で使ってもらうことが理想だという。

忠さんのお話を聞きながら想うこと。それはこのお店が町の“顔役”として近所さんに愛され、それ以上に大町市にとっても象徴的なお店であったということ。それだけに、現在はガランとしてしまった厨房を見ながら話す忠さんからは寂しさと共に、年老いてなお地域に貢献したいという強い想いを伺い知ることができた。

そんなオーナーの想いを汲んで事業を始めたい方は、小日向ご兄弟にお話を伺ってみてはどうだろうか。きっと心強い味方となって、あなたの事業をサポートしてくれるだろう。

（1336文字）

地元で愛された電気屋が
再び灯りを照らす場へ

八日町・旧電気屋「ミヤハラ電器」

オーナー　宮原　敏喜さん

今、大町で一番ノリの場所 BASE OMACHI（ドットベース大町）をご存知だろうか？
地元の人々からは40年余りミヤハラ電器として親しまれてきたその建物、場所は信濃大町駅前商店街を下り、塩の道ちょうじやの隣にある。

どことなく硬い表情で迎えて下さったのはオーナーの宮原敏喜さん。変なことを聞いたら怒られるのではなかろうか、と恐をよぎりつつもインタビューのお願いをすると、「なんでもきいて」と快諾して下さった。

宮原さんのお父様は上田のご出身で、元は警察官として大町に赴任されてきた。戦後は保険の外交員をしていたが、昭和24年8月、宮原さんが生まれた年に電気店「ミヤハララジオ商会”を創業。
自ら東京の秋葉原まで部材を買いに行き、製造から販売まで手掛けていた。創業当時は、お隣にある布地販売店の場所に店舗があったが、その後、手狭になり現在の場所で”株式会社ミヤハラ電器”としてオープンした。

当時大町には7千～8千世帯ほどが暮らしており、そのうち7軒に1軒はお客さんとして抱えていた。
テレビ・マッサージ機など電化製品の販売から、修理、設置工事まで、いわゆる町の電気屋さんとして地元商店街で愛される店で、宮原さんも子供の頃から休みの日はよく手伝いをしていた。「冰のドラムに太いシーフル巻いたやつを引っ張ってさて、集落じゅうずっとテレビの配線やるの手伝ったりしてたよ」

転機となったのは、宮原さんが東京の大学に在学中のこと。大学3年の12月に父が倒れたとの電報があり、慌てに帰ると、背が高く厳しくて入ったら怖られる父が別人のようになっていた。その姿にショックを受け、元々学業より商売に強く興味のあった宮原さんは店を継ぐことを決意。「俺は5人兄弟の末っ子だったけど、結局親父の血を一番濃く引いたのが俺だったんだろうね」
それから、「大きくなったら結婚しよう」と中学2年の頃に約束し、離れてからもずっとハガキや手紙でやりとりをしていた現在の奥様と27歳で結婚。店の経営は順調で、年間1億円もの売上げがあったものの、資金繰りで苦労し、店を閉めてから去年で10年になる。
建物を譲渡してしまって駐車場にでも、という話もあったが、修繕を使ったしっかりとした建物だけに傷んだ部分を直せば十分使えるという思いもあり、そのままになっていた。

そんな中、3年前から”空き家の学校”という取り組みがスタートし、街をなんとかしようという人達が集まり空き家の調査・研究が始まった。会議を重ねるうちに机上の理論ではなく、実践しなければだめだ！ということになり、「それならうちがあるから、やってみるか。」と場所の提供を申し出た。
19年には地域住民らでつくる団体「信濃大町まち守会」が発足。ちょうどそのようなタイミングで、株式会社フリープロートの代表取締役CEOの星田和太さんと繋がり、人が集まる拠点としてこの場所を使わせてくれないかとの打診を受けた。まち守会と宮原さんに対して星田さんがプレゼンを行い、それを聞いて宮原さんは「こいつら、本気でやる気だな。」と感じたという。「自分たちで好きなようにやるならやっていいよ。」という条件で正式に契約を交わした。

40年分の蓄積された物の片付けや掃除は、一人ではとても出来ない大変さだった。「彼らは立派だよ。寒い中もずっと壁塗ったりしてね。」

そうして、旧ミヤハラ電器はユニークな貸しスペース BASE OMACHI として見事に生まれ変わった。「地元の商店街の人達もほとんどみんな来てくれて、開けてもらってよかったって言われるね。」「ここで何十年も商売やってきて、これまでのつながりがあっての今だから。シャッターを閉めてる寂しさ、なんとか開けたい気持ちがずっとあって。」「人の出入りが多くなれば、町に面した店にある場所だから、活用してもらえれば。」と宮原さんは言う。

インタビューが終わる頃、ちょうど地元の高校生が自習するためにやってきた。彼女も”信濃大町まち守会”の一員だ。宮原さんとは顔馴染みで、にこやかな表情で会話をする様子が見られた。きっとこのような温かな営業がこれからもこの場で続いていくのだろう。　（1430文字）

図 12・13　空き資源カルテの一例

②　メディア掲載一覧

本事業期間内でメディアに取り上げていただいた記事一覧（合計11件）を表7に示す。それ以降の図14～24 に掲載記事を添付する。

表７　メディア掲載一覧

図版番号	日付	掲載紙	見出し	ウェブ上の掲載
図 14	8/22	大糸タイムス	“資源”に着目　古材のリユース	●
図 15	10/2	大糸タイムス	“ガランドウ”から発想機会　古材のリユース	●
図 16	11/23	大糸タイムス	不動産で建物検査体験	●
図 17	12/12	大糸タイムス	大町に活動「ベース」誕生	●
図 18	12/14	大糸タイムス	大町わがまち案内人と水路巡る	●
図 19	1/22	大糸タイムス	まち歩きで魅力発見	●
図 20	1/23	朝日新聞	大町の空き家活用へ相談拠点	●
図 21	1/29	大糸タイムス	官学連携まちづくりが広がる	●
図 22	2/2	中日新聞	電器店一新　町の拠点に	●
図 23	2/20	日本経済新聞	移住ライフの発信拠点	●
図 24	2/27	大糸タイムス	古地図手に散策　歴史触れる	●

2019年（令和元年）8月22日（木曜日）

8/22 大糸

〝資源〟に着目 古材リユース

大町市と信大 東大「空き家の学校」で模索

大町市と信州大学、東京大学が共同で取り組む定住促進まちづくり研究事業「空き家の学校」が18日、五日町のいっし・あーとすぺーすなどで開かれた。空き家の活用方法を考える同事業の一環で、空き家対策だけではなく〝空き家の価値〟に視点を置き、「古材のリユース」をテーマに古材を洗って磨き、作り変えて新たな価値を模索した。

地域住民や学生など約15人が参加。地域の何でも屋として活動する「よろずや」の今井伸悟さんを講師に、市内の空き小屋から出た古材を水洗いし、やすりで磨いていった。作業中、「この木は何だろうか」「何に使っていたのだろうか」など、「空き家の中の資源」にも注目。何に使用できそうかを考え、ベンチを制作した。

参加した日高弘次さん（41）＝三日町＝は「古い木は捨てられると思っていたが、ちゃんと洗って磨けばきれいになり、使えるのは発見。いつか自分でもやってみたい」と話した。

空き小屋から出た古材を磨いてきれいにしていく

図 14　大糸タイムス（8/22 付）

昭和21年8月10日 第三種郵便物承認　8

大糸タイムス

〝ガランドウ〟から発想期待

大町市・東大・信大 空き家改修し活用探る

大町市、東京大学、信州大学の定住促進共同研究で行っている「空き家の学校」の4～5時間目が9月28日と29日に開かれた。これまで教室として活用してきた八日町の旧ミヤハラ電器店のセルフ・リノベーション作業を体験し、空き家の整え方と活用の実例を共有した。

今後この物件を活用予定のフリーフロート社・屋田翔太社長（34）＝三日町＝が講師に。前職のアウトドア事業所で新規事業開拓に取り組んだ経験を生かし、リノベーション作業をリードした。

物件を空っぽにすることで新たな発想が生まれることを期待し、残された商品や棚などをすべて運び出して店内を撤収し、いったん〝ガランドウ〟に。店内に想像以上に広いスペースが現れた。リノベーション後に使うパーティションも協力して制作。空き家の廃材をのり、板に張り付けて合わせることで、おしゃれなディスプレイが出来上がった。

屋田さんは狩山などへのトレイルランの拠点となる「ランステーション」とすることを提案。これまでのコミュニティスペースとしての役割を残しつつ、キャンプやスキー用品の展示販売も行う。人が集い、経済活動にもつながる好循環を生み出すことを期待した。

各大学生や地元住民、高校生など20数人が参加し、力を合わせた。市まちづくり交流課定住促進係は「みんなで関わることで関心も高まり、活用方法が他の空き家にも広がっていけば」と期待していた。

がらんどうに片付けられた広々とした物件内部

廃材を使いリノベーションに用いる壁を制作

おくやみ申し上げます

徳武 保忠さん（とくたけ・やすただ＝旧総合病院で死去。95歳。告別式は2日午後0時30分から同村神城白馬村北城寝倉、旧山岳荘経営）病気療養中のところ、9月30日午後1時40分、市平大町飯森の長谷寺で。喪主は長男の志雄（しゅうお）さん＝会社員。

クマ出没

▽9月30日午後4時20分ごろ、大町市平大町温泉郷ゆんどうケ丘付近でクマ1頭が目撃された。

気象館中のところ、1日午前6時23分、自宅で死去。88歳。告別式は3日午後1時から同市北原町の天正寺で。喪主は長男の定朗（しろう）さん＝東京電力パワーグリッド㈱勤務。

昇さんは、地元出身。

図 15　大糸タイムス（10/2 付）

不動産で建物検査体験

大町「空き家の学校」6時限目

大町市・東京大学・信州大学が共同で行う定住促進研究事業「空き家の学校」の本年度6時限目「インスペクションしてみませんか?」は15日、市内で開かれた。市内外から10人が参加し、中古住宅を売買する際に注目されているという建物検査「インスペクション」を実際の空き不動産で体験しながら、空き不動産の上手な活用方法を考えた。

同事業は、JR信濃大町駅前のエリアをモデル地域として、定住促進のためのまちづくり研究事業に共同で取り組み、空き不動産を町の資源ととらえて、地域が元気になるための空き家の活用の可能性を考えている。

同日は同市の竹内設計工房一級建築士の竹内祐一さんを講師に、実際の空き不動産で、外壁や基礎部分、柱のひび割れなど住宅の劣化状況や欠陥の有無をどのように判別するか検査方法を学んだ。

インスペクションを行うことで空き不動産を安心して購入できる判断材料やトラブルの減少にもつながる。市役所まちづくり交流課定住促進係は「空き不動産を流通に乗せるなど次につなげやすくなる。インスペクションというひとつの手法があることを知ってもらいたい」と話した。

実際の空き家でインスペクションの手法を体験する参加。

図 16　大糸タイムス（11/23 付）

大町に活動「ベース」誕生

来年オープンへお披露目

ドットベースオオマチのお披露目パーティーに大勢が来場した

大町市八日町の旧ミヤハラ電器店に、さまざまな活動の拠点（ベース）となるスペース「BASE OMACHI（ドットベースオオマチ）」が誕生した。スキー用品の輸入・クリエイティブ事業・まちづくり事業を手掛ける五日町の「フリーフロート」（屋田翔太代表）が、「想像力次第で使い方いろいろ」なスペースとして運営する。現在プレオープン期間中で、来年度からのオープンを予定している。

座席やテーブルを自由に配置を変えることができ、会議やイベント、学生が利用できる勉強スペースなどを想定する。200インチ4Kのプロジェクターも完備。来年春にはシャワーとロッカーを備えたランニング・サイクルステーションとしても営業する。

11月29日にお披露目パーティーを開いた。地域住民や関係者、友人同士や紹介で来場した人の他、旧ミヤハラ電器店が市や大町岳陽高校などによって取り組むまちづくり事業の拠点だったこともあり、関わった学生や職員などが参加。商店街の飲食店からテイクアウトした総菜や参加者が持ち寄ったお菓子などを楽しんだ。参加者は地域に新しくできた拠点で交流し、今後の新たな可能性を展望した。

屋田さんは「ここに来ることで発見があり、自分がやりたいことをここで実践する。ドットベースオオマチからスタートして大町が盛り上がれば」と、地域の拠点を目指し、事業を進めていく。

ドットベースオオマチの問い合わせはフリーフロート☎0261-85-2571まで。

お知らせ

しめ縄飾り池田で講習会　15日

池田町一丁目のコミュニティカフェ「実家の茶の間」は15日午後1時半から「しめ縄飾り講習会」を開く。講師は、同町八幡神社のしめ縄作りを指導する窪田留栄さん。参加無料。軍手持参。問い合わせは曽根原さん☎080・4687・4002まで。

落とし物

（8日、大町市大町の店舗）

問い合わせは、大町警察署会計課☎026

（木曜日掲載）

図 17　大糸タイムス（12/12 付）

わがまち案内人と水路巡る

大町市・東大・信大　市街地の歴史に関心

大町市・東京大学・信州大学が共同で行う定住促進研究事業のまち歩き「大町わがまち案内人」は13日、市内で行われた。第3回の同日は「まちの成り立ちと水の関わりを探る」をテーマに市街地を流れる水路を巡り、参加者が水に関わりの深い大町の歴史に関心を深めた。

同事業では、空き資源のマッチングを支援する組織として「信濃大町まち守舎」を発足させ、まちを知る機会を創出し、空き資源の掘り起こしや情報の共有化に取り組む事業を実施。国土交通省の「空き家対策の担い手強化・連携モデル事業」の採択を受けている。

同日は市内外から10人ほどが参加。NPO法人ぐるったネットワーク大町の鈴木幸佳さんが案内人を務め、市街の裏道を歩きながら昔から住民に使われている町川などの水路をたどった。

14日は定住促進アドバイザー・梅田敏男さんを案内人に「まちなかで感じる山とダム」をテーマに市街地を歩く。午前10時から正午まで、当日参加も可。

今後は来年1月18、26日、2月8、25日にも開催。それぞれ写真映えスポットや空き家の活用、古地図と現在の町並みを照らし合わせるなどをテーマにまち歩きを行う。

参加費は一人100円（学生は500円）。定員各回10人。問い合わせは市役所まちづくり交流課定住促進係☎0261-22-0420まで。

水路をたどりながら市街地を巡る参加者

図 18　大糸タイムス（12/14 付）

まち歩きで魅力新発見

「大町わがまち案内人」26日に

大町市の地元住民が案内人となり、まちを歩いて新たな魅力発見や大町を知る機会にする「大町わがまち案内人」の6回目が、26日に開催される。スキー用品の輸入、まちづくり事業などを手掛けるフリーフロート（五日町）代表の屋田翔太さんが案内人となり、同社が取り組む空き家の活用や空き店舗を巡る。

大町市と東京大学、信州大学が取り組む空き家の活用事業「空き家の学校」から発展した任意団体「信濃大町まち守舎」が主催。5回目は18日に開催し、7人が参加。6回目は同社のオフィスや改装を進める店舗などを屋田さんが案内し、同社自ら行うリノベーションやDIYなどを紹介する。

まち守舎事務局の市定住促進係担当者は「空き家の活用などを考えている人に、具体的な活用方法や取り組みを見てほしい」としている。

午後2～4時。定員10人。申し込み締め切り24日。参加費1000円、学生500円。申し込み・問い合わせは同係☎0261-21-2210まで。

地域住民が案内するわがまち案内人（第5回目）

図 19　大糸タイムス（1/22 付）

日新聞　第3種郵便物認可

大町の空き家活用へ相談拠点

移住・定住促進へ魅力発信

かつて「塩の道」の拠点宿場として栄えた大町市が移住・定住や空き家紹介、まち歩きなどの相談を強化している。市や大学、自治会長、高校生ら幅広いメンバーで構成するまちづくり組織が市街地に相談窓口を設置。誰でも気軽に立ち寄り、情報交換ができる場を目指す。

「信濃大町まち守舎」の相談窓口は、市中心部の観光スポット「塩の道ちょうじや」の東隣にある「ドットベース大町」にできた。10年近く空き店舗だった電器店を改修。2月22日までの隔週金・土曜と、不定期の平日午後1～5時に大学助教授や元地域おこし協力隊員、移住経験者らが相談に乗ってくれる。

「信濃大町まち守舎」のメンバーで、移住体験者の屋田翔太さん（左）。白馬村の友人夫婦に大町市の子育て支援などを説明していた＝いずれも大町市

まちづくり組織「情報交換できる場に」

大町市は近年、空き家の増加が問題となっている。15年度の調査では市内全域に425戸の空き家を確認。市中心部の商店街では空き店舗が目立つ。

18年度、市は東大、信州大と共同して定住促進を目的に「まちづくり研究事業」に取り組んだ。18年6月～19年3月に「空き家の学校」を15回開講。空き店舗を再生活用するため、受講者（延べ約300人）は空き店舗の大掃除から始め、民泊や空き家の流通などを学んだ。

「信濃大町まち守舎」が相談窓口を開設する空き店舗を活用した「ドットベース大町」

この活動から生まれたのが、信濃大町まち守舎だった。大町市は北アルプスや仁科三湖など豊かな自然に恵まれている。「市の魅力や就労、子育てなどの情報を発信できる場所が必要」との意見に推され、誰でも気軽に参加できる任意団体として発足した。

国の「空き家対策の担い手強化・連携モデル事業」に採択され、市を挙げての事業として活動している。

白馬村から19年3月に移住した屋田翔太さん(34)はメンバーの1人。まちづくり事業などを手がける「フリーフロート」の最高経営責任者（CEO）で、ドットベース大町を運営する。

4歳と1歳の娘2人がおり、移住のきっかけは「保育園や幼稚園の数が多い。手厚い子育て支援策も魅力です。出産祝い金のほか、入園・入学時に商品券のプレゼントも」と話す。窓口担当者も務め、自身の体験を移住希望者に説明し、市の担当部署の紹介もする。

窓口は期間限定の予定だが、市は「3月以降の活動はメンバーで検討する」としている。窓口は予約不要。問い合わせは、市定住促進係（0261・22・0420）へ。（近藤幸夫）

図 20　朝日新聞（1/23 付）

官学連携まちづくり広がる

大町市と信大・東大　空き家・店舗活用へ前進

空き店舗をDIYし起業した屋田翔太さんが　まちあるき案内人を務めた

大町市が、信州大学や東京大学と研究を進める空き家・空き店舗の活用を含めたまちづくり事業は、平成27年度のスタートから5年が経過し、空き家・空き店舗の活用法を探る「空き家の学校」や、まち歩きを主催する「信濃大町まち守舎」が立ち上がるなど活動の幅が広がっている。それぞれの活動の中で、空き店舗での起業も進むなど結果を出している。

空き家・空き店舗の活用事業は、仁科町、五日町、八日町、日の出町をモデル地域に研究が始まり、平成30年度から東大が加わった。

4町に40～50程度の空き家・空き店舗があるとされる中、空き家の学校や信濃大町まち守舎などの活動を通じ、まちの魅力発信や、空き家・空き店舗所有者と活用希望者をつなぐ仕組みの構築などを目標に掲げる。

これまでの取り組みの中で、スキー用品を輸入販売する会社が今年4月から、八日町の旧ミヤハラ電器店で本格的に開業する予定だ。同事業を担当する市まちづくり交流課定住促進係の西澤剛志さんは「ようやく芽が出てきた」と事業の前進を実感している。

26日には、信濃大町まち守舎によるまち歩きイベント「大町わがまち案内人」の第6回が市内で開催され、旧ミヤハラ電器店で創業するフリーフロート代表取締役の屋田翔太さんが講師を務め、空き店舗を活用した創業のポイントなどを説明した。

新型肺炎「指定感染症」に　マスク着用・手洗い励行を

世界中で感染が拡大している新型コロナウイルス関連の肺炎について、政府は28日、感染者を強制入院させるなどの措置をとることができる「指定感染症」とする閣議決定をした。県や大北地域の各市町村などが対応できるよう備えている。

大町市では今月24日から、市ホームページや大町有線放送、市ケーブルテレビで対策を周知。風邪やインフルエンザ予防のため、マスク着用やせきしゃみをする際にマスクやティッシュなどで口や鼻をおさえる「せきエチケット」、うがい・手洗いの励行などを引き続き呼び掛けている。市保健センターは「どんどん情報が変わっているので、厚生労働省や県のホームページなどを随時確認してほしい」としている。

電器店一新　町の拠点に

大町 屋田さん改装

「住んだら最高の町に」

「BASE OMACHI」などで開かれた街歩きツアー＝いずれも大町市の同所で

元は電器店だったビルの一階が、しゃれた雰囲気の町の拠点に生まれ変わった。大町市中心部に昨年十一月にオープンしたレンタルスペース「BASE OMACHI」（ドットベース大町）。プロジェクターを備え、机といすは自由に動かせる。壁沿いには木棚や色とりどりのスキー板も。ヨガ教室から移住相談まで、さまざまな形で活用が始まっている。

「しっくい塗りは、やりたい人が集まってきて、作業の人数がどんどん増えました」

一月二十六日、地域住民らでつくるまちづくり団体「信濃大町まち守舎」が開いた街歩きツアー。県内外から十人が参加し、案内役の屋田翔太さん㉜がドットベースで改装の様子を紹介した。同ベースの運営会社の社長だ。

昨年三月に白馬村から大町に移住したばかり。より良い子育て環境を求め、二年前に設立したばかりの会社ごと引っ越して来た。スキー板の輸入やホームページ制作などを手掛け、同ベースの運営も事業に加わった。

もともと日曜大工が趣味で、大町の自社事務所の内装も社員らと仕上げた。元電器店は、市や信州大などが空き家活用に向けた共同研究の拠点にしていた。空いていることを知った屋田さんたちが、「使いたい」と手を挙げた。

広さ百十平方メートルほど。改装は昨年十月末に始め、一週間ほどで完了。床や天井、壁をすべて塗り直し、奥には新たな壁を設けた。金属の柱は木のブロックを組み合わせたカバーで覆った。

これまでコーヒー講座、スポーツ愛好者の情報交換会、まちづくり講演会などに使われた。まち守舎が定期的に開いている遊びから暮らし、移住までの何でも相談窓口では、まち守舎メンバーである屋田さんも対応。「ドットベースを通って良かった。これからも面白いことがたくさん起きそう」と期待を込める。

現在はプレオープン中。これからシャワールームとトイレも設け、春にはサイクリングやランニングの拠点としても使えるようにするつもりだ。さらに、近くにある別の空き店舗を自ら発掘し、改装を始めた。飲食や宿泊事業に乗り出したいと考えている。

屋田さんは白馬村出身。十代半ばからスノーボード選手として海外を転戦した。その後にアウトドア体験を提供する白馬の会社に入り、北海道や四国でも勤務。スキー輸入業を志し、一八年に現在の会社を立ち上げた。

生活の場として大町を選んだ屋田さん。「だからこそ、ここで徹底的にやりたい」。今も暮らしやすいと感じているが、今後も自分たちで街中にさまざまな場所をつくり、盛り上げていくつもりだ。

「観光で来る人も楽しいけど、住んだら最高の町に」

「外から見たときにも、もっと暮らしたい町に」と意気込む屋田さん

図 22　中日新聞（2/2 付）

図 21　大糸タイムス（1/29 付）

長野　まち人

ドットベース大町

（大町市）

かつて紡績工場や黒部ダム建設の産業拠点として栄えた長野県大町市。長く立派な大町駅前の商店街からは当時の繁栄ぶりがしのばれるが、シャッターを閉じた店が目立つ。空き店舗を使い行政や企業、地域住民らが連携し、移住者を迎えて街のにぎわいを取り戻す新しい拠点ができた。

JR信濃大町駅から商店街を歩いて6分。2019年秋に、ビルの1階にユニークな貸しスペースが誕生した。もともとは電器店だった場所を改装した「BASE OMACHI（ドットベース大町）」だ。110平方メートルほどのスペースの中央にはテーブル、壁には200インチのプロジェクターを備える。

運営するのはフリーフロート（同市）。代表取締役CEOの屋田翔太さん㉜は当初、長野県白馬村で輸入代理業などを始めたが、2019年3月に商品倉庫や子どもの教育環境を考え大町市に移住した。空き家の電器店を借りて内部を改装し、多目的拠点として提供している。

「午前中は椅子やテーブルを片付け、ヨガ教室に。一言でいえばライフスタイルの発信基地かな」と屋田さん。スポーツ団体の情報交換会や商店街の会合、コーヒーの入れ方講座が開かれることもある。高校生の自習室にもなっている。

「やりたいことをベースにする」という意味を込めて名付けた「BASE OMACHI」。もともとの空き電器店は、大町市が移住・定住促進の活動拠点として利用していた。「空き家もまちの資源。住んでいる人の意識を変えたい」（大町市まちづくり交流課定住促進係）と、東京大学や信州大学の研究者と活用講座を開いてきた。

屋田さんは「空き家問題に取り組む面白い事業」と評価し、店舗内部を改装して同社の街づくり事業として継承した。

「BASE OMACHI」の存在は、同市の空き家活用事業が目指すまちづくりの活動拠点でもあるが、屋田さんも担当する。「子育ての話もできるし、地域のことが分からないので、街のおじさんに教えてほしいといった要望にも対応する」（屋田さん）

「BASE OMACHI」の活動はさらに発展しそうだ。シャワールームやトイレなどの整備を進め、今春にはサイクリングやトレイルランニングの拠点としても使えるようにする。屋田さんは「大きなもうけはないが、ここを軸に街がにぎわえば事業につながる」と街を盛り上げていく考えだ。（竹内雅人）

電器店を改装した街づくり拠点は多様なライフスタイルの発信の場に

移住ライフの発信拠点

図 23　日本経済新聞（2/20 付）

1　2020年（令和2年）2月27日（木曜日）【火～日曜日発行】

梅田さん（右）の案内で古地図を片手にまちを巡った

古地図手に散策 歴史触れる

大町 まち守舎「わがまち案内人」

大町市の地元住民が市内を案内して新たな魅力を探る「大町わがまち案内人」が25日、開かれた。市内外から9人が参加。京都府から大町に移住して37年で、設計業の傍らアウトドアガイドを行う梅田敬舅さん（60）が「古地図を片手にまちなか歩き」をテーマに案内し、昔の街並みや現在の風景に思いをはせた。

梅田さんが用意した江戸、明治、昭和初期の3枚の大町市街地の地図を片手に、旧役場や旧郵便局の周辺などを巡った。敵の侵入を阻むために直角に折り曲げた道の名残や、町名や道の名前の由来、市内に路面電車が走っていたころの写真などを梅田さんが紹介。大町在住の参加者からの昔話もあり、梅田さん自身も「勉強になった」と喜んでいた。

東京都から大町に移住してきた伊井沢稔さん（65）は夫婦で参加。「中とは違って歩くことで歴史や街並みを感じられた。知らないことだらけで面白い」と街の歴史に触れていた。

主催は大町市と東京大学、信州大学が取り組む空き家の活用事業「空き家の学校」から発展した任意団体「信濃大町まち守舎」。今回が8回目の開催となった。

・機能別団員は、班長以上の幹部経験者や50歳以上の団員経験者など現場で即戦力となる者が対象で、訓練や出初式など礼式への参加を免除とした。団員でないと消防車両を運転

団員の減少が課題に

大和幸久氏、大鰐富義氏、平林英市氏の5氏が質問。2日目の27日は傅力健氏、太田昭司氏、山本みゆき氏、大竹真千子氏、中村直人氏の5氏が質問する。

図 24　大糸タイムス（2/27 付）

３．評価と課題

①　相談員や専門家の研修・育成、交流機会の創出

- 信濃大町まち守舎メンバーによる月に一度の月例ミーティングのほかに、臨時でミーティングを柔軟に開催し、オンライン会議等も活用し情報共有の機会を可能な限り創出した。結果、本事業期間内では、月平均 1.7 回の会議を開催し概ね良好に意思疎通ができた。ただし、会議以外の情報共有は特定のメンバーに偏り、一方向的な部分もあった。また蓄積するデータの円滑な共有方法も含め今後の検討課題としている。
- 地元の様々が案内人となり、その人ならではのまち歩きの機会を提供するまち歩き「わがまち大町案内人」を計8回開催した。それぞれの案内人ならではの切り口で、同じまちなのに異なる価値を提供することができた。今後も春夏秋冬の大町の魅力を様々な視点で切り取る場としてシリーズ開催する予定。そのためにもフライヤーデザインの体裁を本事業当初から整えることを意識した。折り畳んでポケットに入れられるまち歩き用のデザインとなっている。そして案内人として、参加者として双方の住民参画の関わりしろを持つことができたことは、今後の取り組みの重要な軸になると考えている。課題としては、空き家・空き店舗等の見学も併せて実施するとしていたが、実現できていないので、空き資源カルテの内容とあわせて、今後絡めて紹介することを検討している。場合によっては、空き資源に特化したまち歩きも行うことで、起業・移住希望者への門戸も引き続き有していきたい。

・　当初2回開催予定であった「空き家の学校」は、非常に認知度が向上し、様々な企画・テーマが持ち込まれるように育ってきったことで、本事業期間内では計6回開催するに至った（※7回予定していたが、新型コロナウィルスの影響で延期）。特に、2月24日に開催した陶芸作家の回は老若男女の町内住人が多数参加し、大盛況となった（写真5）。

写真５　陶芸家（移住者）による空き家の学校

写真６　視察の様子：金澤町屋情報館

また、石川県金沢市・輪島市へ大型バスを借り上げて先進地視察も実施した（写真6）。主に、「ごちゃまぜ」によるソーシャル・インクルージョンで著名な社会福祉法人仏子園の取り組みについて学ぶ内容である。シェア金沢、輪島カブーレを中心に現地訪問・説明機会を頂戴し、社会福祉の観点の重要性を再認識する機会となった。同時に、いかに地域全体として稼ぐか、エリアの価値を向上する様々な取り組みに触れた。

課題としては、Facebook 上での情宣に終始しており、紙媒体としての効力が薄いように感じている。今後は、春に公開予定のウェブサイトを弾力的に活用し、情報発信の工夫を試みていきたい。

②　地域の専門家等との連携体制の構築

・　「空き家の相談会」を当初計2回の開催としていたが、1回の開催となった。地域の様々な専門家と協働しテーマ（賃貸・売買／建物調査／相続・税務／解体・古材リユースなど）ごとに開催することは変えずに今後も開催したいが、空き家の学校では地元の建築士らとの連携が図れているので、その役割の棲み分けも検討課題である。また、まち歩き等とも弾力的に同日開催するなど参加のしやすさについて考慮していきたい。

③　相談事務の実施

・　前述のとおり、旧電器店の改装プロセスを学びの場と捉えて段階的にリノベーションを施し、空き店舗が再生した。そのなかに、山から移住まで受け皿となる多機能な相談窓口を設置することできた。12 月中旬に開設されてから計 46 組の相談実績があるが、まだまだ認知度は低い。今後も様々な取り組みのなかで、人と情報が集積する拠点として機能することを目指している。課題としては、相談業務のフローがまだ曖昧であり、信濃大町まち守舎メンバー間での情報共有方法や、対応手順の検討は今後改めて必要と考えている。

・　そして、地域住民（子どもからご年配の方まで）が日常的に立ち寄れるコミュニティ・スペースとしてもまちに開くと当初考えていた通り、様々な方々が現に立ち寄り、使い方のアイデアが日々持ち込まれている状況である（写真4）。様々な可能性を模索しながら場の価値を高めていきたい。

④　実施した取組のとりまとめ・公表

- 報告会は、当初、3月13日から15日の空き家の学校の最終日に予定していたが、新型コロナウィルスの影響で開催延期（または中止）としている。
- 通常の情報発信方法として、Facebook の専用ページを活用している。URL は、以下のとおり。
https://www.facebook.com/%E4%BF%A1%E6%BF%83%E5%A4%A7%E7%94%BA%E3%81%BE%E3%81%A1%E5%AE%88%E8%88%8E%E7%A9%BA%E5%AE%B6%E3%81%AE%E5%AD%A6%E6%A0%A1-1517600108385125/
- ウェブ上で「コミュニティサイト」の公開を春に予定している。URL は、以下のとおり。
https://machimorisha.jp

⑤　その他の取り組み

- 「空き資源カルテ」の調査・作成：所有者からの連絡に基づき、現地調査やインタビュー等を行い記録化・マッチング情報のストックを行った（計6件）。空き資源の情報だけでなく、リノベーションの過程も記事にすることで、後進の教材としても機能することを考えている。必要に応じて、「インスペクション(建物検査等)」の推進を地元専門家と連携し行い、計2件実施した。ウェブサイト上でこれから掲載かつ公開予定であるので、反応等を鑑みながら微修正していきたい。

４．今後の展開

- 3の中で個別に今後の展開は触れているが、統合的に空き家等を流通させるための持続的な仕組みづくりのため、大町市との接点（情報の拾い出しと発信による「メディア」の拠点と直接体験できる機会による「場」としての拠点）を創出する試みを進めてきた。今後も継続した取り組みを進めていきたい。そのための財源の確保や組織の形態について、検討課題としている。
- 春に公開予定のウェブサイトを実際に運用しながら、マイナーチェンジを重ねていきたい。これまで実施した様々な取り組みを本サイト上で統合し、地域内外から閲覧・アクセス可能なプラットフォームとしてどのような効果があるか検証する。
- 本事業成果をもとに、統合的に「空き家アセスメント」として体系化することを検討している。具体的には、これまで一緒くたにされてきた空き家情報のあり方を改めて問い直し、建造物が持つ様々な潜在的情報にも注目する。つまり、空き家の顕在的・潜在的価値の両面を評価する手法を体系化することで、新たな不動産情報のあり方を構築していきたい。そして、関わりしろを継続的に創出することで流通と自治の強化を促し、エリア全体の価値を高めていきたいと考えている。

■事業主体概要・担当者名			
設立時期		2019 年 5 月	
代表者名		松下俊樹	
連絡先担当者名		西澤剛志	
連絡先	住所	〒398-8601	長野県大町市大町 3887 番地
	電話	0261-21-1210	
ホームページ		https://machimorisha.jp（2020 年春稼働予定）	